

第 2 回 (下)

『名門大学入試問題で知る「反」日本史』

須藤公博、講談社、2013年

グレゴリウス13世と謁見

さて、いよいよ最大の目的地であるローマです。

なんと、国境近くから、ローマ教皇グレゴリウス13世が遣わした約300名の兵に迎えられ、その兵に護送されながらローマに入ることになりました。教皇グレゴリウス13世は「東方の使者」たちをドイツ皇帝やフランス国王と同列に扱い、公式の謁見を行います。長崎を出発してから、実に3年1ヶ月が過ぎていました。

グレゴリウス13世（1502～1585）は1572年から1585年にローマ教皇をつとめました。自らも学問を好み、その学問を奨励したことで知られ、ズレが累積していたユリウス暦を廃止し、グレゴリオ暦と呼ばれる新暦を採用したことで有名です。また、ローマのサン・ピエトロ大聖堂にグレゴリウス聖堂を建築し、1580年にはローマにある7つの丘の中で一番高いここを選んで、教皇の夏の住居とします。ここは1870年にイタリアが統一されてから、王宮、続いて現在は大統領官邸となっている場所です。

1585年3月23日、伊東マンショ・千々石ミゲル・原マルチノの三人は、和服で正装し、黄金のフサフサのついた帽子をかぶって、飾り布を巻き、馬に乗って群衆の中をゆっくりと進んだそうです。先導したのは教皇を護衛する武装騎馬隊と斧を携えたスイス人歩兵などでした。

いよいよ待ちに待ったローマ教皇グレゴリウス13世との謁見です。場所はバチカン宮

殿の「帝王の間」というところで、全キリスト教世界の代表者が集まる中で行われました。

3人の少年は教皇の前でひざまずき、床に顔をつけると、グレゴリウス13世は立ち上がるように言い、抱擁・接吻して、涙を流したという。

マンショは大友宗麟の書状を、ミゲルは大村純忠と有馬晴信の書状を差し出して、ディオゴ・メスキータ神父の通訳で話し始めます。

この時、三人は織田信長から預かったある物をグレゴリウス13世に贈呈しました。

何でしたっけ？

そうですね。「安土屏風」でしたね。残念ながら、現在、その「安土屏風」はバチカンで所在がわからなくなっているそうです。そして、マンショとミゲルは教皇の外套の裾持ちの栄誉を授かるなど、グレゴリウス13世から異例の待遇を授かりました。

ところで、中浦ジュリアンはどうしたのでしょうか？

彼は高熱を出したため、謁見の行列に加われなかったのです。なんということでしょう！ただ、どうしてもグレゴリウス13世に会いたいという思いが通じて、儀式の直前に単独で会うことができたといいます。これを神の恵みと言わずしてなんと言えるでしょう。

教皇に謁見して、その足に接吻すると、「とにかく体を治すことが大切である」と優しく抱擁されたそうです。また、ジュリアンのために名医を派遣するなど、終始、使節を気遣ってくれたのがグレゴリウス13世なんですね。

ところが、びっくりするようなことが起きます。なんと、ローマ教皇グレゴリウス13世が、謁見の一八日後に亡くなってしまったのです。教皇の年齢は84歳ですから、遣欧使節との謁見は体力を消耗させたのかもしれませんが。少年たちは、さぞ困惑したでしょう。

そして、ただちに、ローマ教皇を選出する選挙システム「コンクラーヴェ」が開催されました。

シスト5世の戴冠式に出席

グレゴリウス13世の葬儀やコンクラーヴェから約2ヶ月の間において、シスト5世（1520～1590）がローマ教皇に戴冠しました。批判も多い一方で、在位わずか5年で教

皇領の治安の回復やローマ教皇庁の財政再建、ローマへの公共事業を推進し、現在のローマの都市の原型を整えたとされる人物です。

新しい教皇シスト5世も、即位2日後に使節と謁見し、5月1日に聖ペテロ大聖堂で執り行われた戴冠式にも招待します。マンショはミサでシスト5世が手をすすぐ際の補佐をする、栄誉ある役を与えられたと言います。

ヴァチカン図書館の「シスト5世の間」にある「**教皇シスト5世のラテラノ教会行幸図**」には、馬にまたがっている四人の少年が描かれているそうです。でも、本当は中浦ジュリアンは参加していなかったのですが・・・。

式典の後、使節のところには各国の使者が訪れ、市民からの贈り物も届けられ、さらにシスト5世から叙勲され、ローマ市からも市民権証書を授与され、ローマの貴族に列せられるという歓迎ぶりでした。すごいですね。そして、シスト5世から日本での布教のための資金や大名への返書、贈り物、旅費が与えられます。

こうして使節一行は、1585年6月3日、ローマを出発。ヴェネチア、ヴェローナ、ミラノなどの諸都市を訪問し、1586年にはリスボンを出発。帰路につき、アフリカのモザンビークを経由して、1587年5月にインドのゴアに到着し、久しぶりにヴァリニャーノに再会を果たします。

いよいよ帰国です！

もう少しで日本ですね。早く家族に会いたい、友達に会いたい、と日本の土を踏むのを心待ちにしていたと思います。

ところが、彼らが出発した後の1587年に**パテレン追放令**が出ています。ですから、彼らの入国についても簡単にはいきませんでした。そのため、ヴァリニャーノ神父がマカオに滞在中に、秀吉の側近であった浅野長政に了解を取り付けたそうです。

どうやって秀吉に会うことができたのでしょうか？

実はここに裏技があったんです。彼らは「**インド副王使節**」として会ったんです！！キリスト教がアジアに広がって、インドのゴアが拠点となっていたことから、キリスト教会では東アジア全体を「インド」と総称していました。そして天正遣欧使節がヨーロッパに行った時に「インドから来た」ことになっていたのです。それをそのまま日本で使ったのです。頭がいいですね！

こうして1590年7月21日に長崎に寄港しました。

「インド副王使節」としてヴァリニャーノ神父とマンショは1591年3月3日、聚楽第で秀吉に謁見しました。マンショはジョスカン・デ・プレの音楽を演奏します。実はこの時、マンショは秀吉に仕官しないかと誘われているのです。ジュリアンにも小姓組にという提案があったそうです。秀吉にしてみると、ちょうど全国統一を完了し、いよいよ朝鮮へ、中国へと言う対外膨張が視野に入っていた時期で、海外に関する情報を彼らがもたらしてくれることを期待したのでしょう。

その後の四人は？

13、4歳で日本を出発した四人の少年は、8年半の間にすっかり青年になっていました。

彼らは、帰国後、どうなったんでしょう？

まず、**伊東マンショ**です。彼は秀吉の二度にわたる申し入れを断り、イエズス会に入ります。1608年に司祭に叙階されたマンショは、中国地方や北九州で布教活動を行いました。でも、1612年11月13日、**メスキータ神父と原マルチノ神父に看取られて、その生涯を閉じました。**

次に**千々石ミゲル**ですが、残念なことに、**ただひとりイエズス会を脱会**しました。その後、大村藩に仕え、神浦と伊木力に600石の知行を受け、名を清左衛門と改め、妻を娶り、四人の子供を儲けていたそうです。1606年2月に出された大村藩のバテレン追放令で、彼はキリスト教を邪教と進言し、自らもキリスト教を捨てて法華宗に改宗したとされます。その後は大村藩から追放されたり、有馬晴信の家臣に殺されそうになったりと不明な点が多く、1633年1月頃に死んだと推定されます。

原マルチノは1608年には司祭になりますが、1614年の幕府のキリシタン禁制により、**マカオに追放**され、1629年、同地で死去しました。

中浦ジュリアンは、1591年にイエズス会に入会し、1608年に司祭になりました。長崎で布教活動をしますが、1632年、潜伏していた小倉で捕らえられ、長崎のクルス町の牢へ送られました。ジュリアンは、1633年10月18日、西坂の処刑場にひかれていく時に、「私はローマへ行った中浦ジュリアン神父である」と、大官に向かって叫び、**穴吊りの刑で逆さ吊り**にされる間、独り言のように「この大きな苦しみが神の愛のため」とつぶ

やっていたと言います。3日後の10月21日に昇天。**遺体は焼かれて、灰は長崎港の海にまかれました。**

実はこの4人の少年たちの「冒険」話は当時、一般大衆にはもちろんのこと秘匿されていました。江戸時代半ば、新井白石が1708年に屋久島に潜入上陸したイエズス会宣教師シドッチらから事情聴取をして、彼ら一行の業績が知られることになりますが、一般の人々が知ることはありませんでした。

明治維新时期、1873年に**「岩倉遣欧使節団」**が訪れたヴェネチアで、たまたま「天正遣欧使節」の足跡と再会するまでは。

なお、天正遣欧使節らは**グーテンベルク式金属活字印刷機** 1台を1590年に持ち帰りました。これは**ヴァリニャーノ神父**の依頼にこたえてメスキータ神父が購入したものです。この印刷機を使って、『サントスの御作業』という本が1591年に出版されましたが、この本は日本語に翻訳されたローマ字綴りのもので、日本で初めて西洋印刷機によって作られた金属活字本でした。その後、7年もの間に**天草版**と呼ばれる「伊曾保物語」「平家物語」「羅葡日辞典」などが出版されていきました。

以上、須藤公博先生の『**名門大学入試問題で知る「反」日本史**』で学んだこと・知ったことを紹介してきました。『天正遣欧使節』（松田毅一、講談社学術文庫）や『戦国の少年外交団秘話』（ディアゴ・サルゲイロ、長崎文献社）を読みたくなくなってきました。

それにしても、4人の少年使節のその後は悲しいですね。もし、ヨーロッパに行かなければ彼らの人生は平穏でつつまじやかなものになっていたのでしょうか。使節に選ばれてしまったが故に、追放とか逆さ吊りの刑に処せられてしまいました。

彼らは幸せだったのでしょうか？ ヨーロッパに行き、神様のような法王に会い、様々な言葉をかけてもらい、普通の人が経験できないことを経験しました。だから、きっと幸せだったのでしょうかね。でも、彼らのことを思うと涙が出てきます。

ところで、すこし補足しておきたいことがあります。

それはグレゴリウス13世が作らせた**「グレゴリオ暦」**についてです。1575年（ということは織田信長が武田勝頼を破った長篠合戦の年です）にグレゴリウス13世は暦法の改革を命じます。

その前に使用していた暦は**「ユリウス暦」**ですね。

ユリウス暦の1年は1太陽年よりも**11分4秒長かった**そうです。この誤差はプトレマイオスの頃から知られ、復活祭の日の決定にやっかいな問題を引き起こしていました。というのは、復活祭の主日は春分後の満月直後の日曜日と決められています。

ところが、毎年11分4秒のズレが何百年にも積み重なった結果、春分に対応する日が、16世紀には10日もズレてしまっていたそうです。このズレをなくすことがグレゴリウス13世の大きな課題となっていたのですね。いろいろ検討した結果、解決策ができあがりました。

その解決策とは、ユリウス暦で4年に1回と決められていた閏年を、400年ごとに3回減らすことにしたのです。どういうことかということ、400年に4回巡ってくる下二桁が「00」になる年のうち、3回は閏日の挿入をやめることにしたのです。つまり100で割り切れる年のうち、400でも割り切れる年（例えば1600年、2000年、2400年・・・）は閏年にしておくが、その他の年（例えば1700年、1800年、1900年）は平年とする、というものでした。また、10日のズレをいっぺんに削除することも決まりました。

そしてこれらの解決策は、1582年10月（ということは本能寺の変が起きた年であり、かつ天正遣欧使節が日本を発ったとしてもあります）から実施されました。この結果、グレゴリオ暦では1太陽年より1年につき**26秒ずつ速く進みます**が、それまでの誤差が修正されることになったのです。こうして**グレゴリウス13世によって、「教会の司る時」と「自然の司る時」の「調和」が図られた**のです。

※最後の補足の部分については、『**暦の歴史**』（ジャクリーヌ・ド・ブルワゴン著、**「知の再発見」双書、創元社、2001年**）を参考にさせていただきました。